

先行事例調査について

目次

1 先行事例調査対象地選定の考え方	1
2 先行事例調査対象地の選定結果（参考資料3を参照）	2
3 先行事例調査の調査項目	3
4 先行事例調査の結果	4

1 先行事例調査対象地選定の考え方

- ・ 先行事例はワークショップでの活用に留意し、文献調査では把握しきれない活動プロセス等に着目し調査を行う。
- ・ そこで、以下の観点から対象地を選定し、先行事例の現地調査を実施する。

先行事例調査対象地の選定の観点

観点①活動プロセスを把握することが可能

- ・ 「元気再生」・「新たな公」等の事業に採択され、外部からの支援も含め、活動・事業が進行中である

観点②集落規模での活動を対象とし、ワークショップへの活用が可能

- ・ 集落規模での活動であり、集落支援への効果が見込める
- ・ ワorkshopを行う中山間地域への適用が見込める

観点③集落元気づくりを行う上で参考となる複数の課題に対応

- ・ 「安心」、「元気再生」、「外部支援の有効性」など、「集落元気づくり」に有効な課題を複数有している

観点④先行事例を実施している主体の協力意向

- ・ 平成19年度NPOアンケート調査における協力意向があることや、今後の集落支援活動に対し協力していただける

2 先行事例調査対象地の選定結果（参考資料3を参照）

県・市町村	事業名／ 取組団体	活動概要	選定理由
佐賀県 三養基郡 基山町	地域資源を活かした持続可能なコミュニティ創造事業（通称：ゆいむすび事業） ／特定非営利活動法人 きびつとの杜	中山間地域にあり、基山町内でもっとも世帯数（213世帯）が少なく数年で限界集落となる可能性の高い宮浦地区において、 危機感を持った地区の住民が主体 となり、孟宗竹の伐採、桜・つつじ・紅葉・クヌギなどの植樹、地元幼稚園の遊び場の提供、果樹オーナー制度の企画運営、 休耕田の棚田の活用 （合鴨農法による酒米を地元の造り酒屋でオリジナルブランド酒としその 販売収益の10%を環境保全協力金として造り酒屋から寄付 ）や様々なイベント等の活動を展開。	高齢化が進む中山間地域 において、地元行政と良好な関係にある地区住民中心の NPO法人が、里山保全や収益が計上される棚田の維持活動、各種イベント等を継続して行っている。 また、新たな公を利用し、 ワークショップ形式で、地域資源の活用方法や持続可能なコミュニティのための経済活動を検討している。 この事例は、 行政との協力関係構築と経済面を考慮した集落存続・再生の方法 の点で、今後の参考となる。
鹿児島県 南さつま市	元気集落「高齢化率60%」からの挑戦／特定非営利活動法人 プロジェクト南からの潮流	南さつま市金峰町大坂地区は、 高齢化率が60%を超える地域で、地域コミュニティの維持・存続があらゆる田畑の荒廃や空き家の増加、担い手不足等の問題など様々な課題を抱えているのが現状 であるが、当地区の長谷集落においては、平成18年度から NPO法人プロジェクト南からの潮流と地域住民が都市住民との交流事業を中心とした共生協働事業に取り組んでいる。 歴史の伝承や自然景観の保全、地域資源を活用した地域間・世代間・都市住民との交流事業等の取り組みを通して元気な集落群のモデルを創出することを目的に新たな公の事業を提案する。	高齢化が進む中山間地域 において、地域コミュニティの維持・存続に向けた、 NPO法人と住民による都市住民との交流事業を中心とする協働事業 が活発に行われている。 また、新たな公の事業として、これまでの 集落単位の活動からそれぞれの地域を結びつける活動 を行っている。 この事例は、 今後の集落と都市との交流の方法と、集落間の連携 を検討する上での参考となる。
熊本県 上益城郡山都町	リスクコミュニケーションとコミュニティバス活用による限界集落の機能再生プロジェクト／国立大学法人熊本大学	山間の過疎において、山都町住民及び職員と熊本大学の防災まちづくりグループのスタッフが連携し、地域防災教育及び避難情報伝達システムの開発を行い、コミュニティバスを利用した活動を通じて集落間連携での防災体制を確立し、限界集落を抱える地域の活性化と再生を目指す。	熊本大学により、 過疎化が進む中山間地域 における大きな課題である防災面への取り組みとして、ハイテク技術を利用した 避難情報発令システムや災害弱者の安否確認システムの構築等 が行われている。 また、この取り組みは、 町営コミュニティバスを集落間の交流や防災教育及び早期避難時に活用し、コミュニティバスの認知度の増加と利活用を行うものでもあり、今後の集落における防災と公共交通の維持 を検討する上での参考となる。

3 先行事例調査の調査項目

- ・取組のプロセス（事業導入にあたっての手順、外部支援者の関わり方、取り組みを実施する上での阻害要因とそれに対する対応）を重点的に把握
- ・取組を実施する上でのキーマン（組織・人材）の把握

先行事例調査の項目

項目	内容	目的
活動内容	どのような活動をしているか	・活動内容、活用している制度・補助金等の把握
活動対象地	活動団体の活動範囲	・活動地域の把握 ・活動を広範囲に展開できるかどうか（他の地区まで活動できるか） ・狭い範囲での活動であれば、どの程度まで活動の有効範囲があるか（他地区で同様の活動を行う際の参考）
活動プロセス	・活動のきっかけ、活動経過、行政・他団体等との協力関係構築のプロセス等	・活動を立ち上げる際の参考
外部支援の受け方	・どこから支援を受けているか（想定ヒアリング内容：自立（集落内）、血縁、地域（市町村内）、外部（市町村外））	・支援者・支援団体の把握 ・支援者・支援団体の発掘方法
活動団体区分（活動団体名称／設立経緯）	・どのような団体として活動しているか（想定ヒアリング内容：地方自治体、NPO、民間法人、第三セクター、民間法人、他）	・団体の活動内容、設立経緯の把握 ・団体設立上の課題とその解決方法 ・活動を立ち上げる際にどのような団体が必要になるかを把握
集落側で活用した資産・資源	・どのような集落側の資産・資源を利用したか	・集落側で活用している資産・資源の把握 ・活動を立ち上げる際にどのような集落側資産・資源が有効かを把握
支援内容	・支援の具体的内容	・人材、技術、費用の3つの観点から支援内容を把握 ・他活動を立ち上げる際にどのような支援が有効かを把握

4 先行事例調査の結果

佐賀県三養基郡基山町(特定非営利活動法人 きびっとの杜)

◇調査日:平成21年1月22日

■集落の現況

- ・集落の世帯数は14世帯、過半数が70歳以上で、農林業従事者の高齢化や担い手不足により耕作放棄地が増加、また、孟宗竹による山地の荒廃も進んでいる。

■活動内容

- ・ 集落の世帯数を増やすためには、自分達の住む環境を良くしないと、都市部の方が住みたがらないと考え、環境整備を活動の基本としている
- ・ 耕作放棄地に生えた竹の伐採、公園の整備、桜や常緑樹の植樹、ウォーキングコースの整備、果樹オーナー制度、農業体験、各種イベントの開催(1,800人が集まる桜まつり、ウォーキング大会)等を行っている



幼稚園児の筍掘体験の様子 *



2008年桜祭りの様子 *

■活動対象地

- ・ NPOの事務所がある集落の居住者が所有する田と畑、山で活動している
- ・ 活動に使用する土地の所有者と、10年程度の土地貸借の覚書を締結している



集落入口にある全体案内図



メンバーが建設した竹の茶室

■活動プロセス(設立経緯)

- ・ 平成15年に理事長が会社の定年退職後に、自分が生まれ育った地域の環境整備をしようと思い立ち、集落の有志8人でボランティア活動を開始したのが発端
- ・ 当初任意団体で発足したが、活動資金を得るために始めたオリジナルブランドの清酒と地域産品販売の利益が会計責任者の個人所得となるので、平成17年6月にNPO法人化
活動資金は基本的に自前で調達



4 先行事例調査の結果

■メンバー構成・ボランティア参加者(活動団体区分)

- 現在の28人のNPOメンバーのうち、10数名が地元で、他は町内の新興住宅地や鳥栖市等の地元以外の居住者
NPOの活動方針・内容に賛同すれば誰でも参加可能
- 植樹祭などのイベントでは地元、基山町内、その他(鳥栖市、小郡市、久留米市、福岡市)のボランティアがそれぞれ1/3の割合で参加
募集はマスコミ(新聞、町広報、ラジオ)を通じたPRが中心



公園を訪れた近隣住民 *



竹の伐採の様子 *

■集落側で活用した資産・資源

- 耕作放棄地を利用した桜の植樹や、公園づくり
- 里山のそま道※や農道、古墳、基山へのビューポイント等を利用したウォーキングコース整備
- 既存みかん畑を利用した果樹オーナー制度

(※そま道とは杣人(そまびと)しか通らないような、細くてけわしい山道)

*の写真は「きびっとの杜」のWebページ <http://kibit.kiyamatown.com/>より

■支援内容(人、技術、費用)

- 当初は集落居住者で始めたが、現在はメンバーの人脈を通じて、広範囲から様々な特技・技術を持つ人が参加
- 植樹、ウォーキングコース、公園整備、イベント開催、広報活動、清酒の企画・販売等、全てをNPOメンバーの技術で実現
- 活動を継続させる経費捻出のため、地域特産品や清酒を販売
- ボランティア参加者のモチベーション維持のために1,000円/時間(ただし1日3時間を上限)の参加費を支給(ボランティア保険にも加入)
- 参加者が活動を継続できるように、楽しい活動となるように工夫
- イベントはメンバーの家族や都市部居住者も参加する共同作業



オーナー制度の
みかん畑



オリジナルブランドの清酒
「きびっとの杜」

■きびっとの杜の事例から学ぶこと (ワークショップ及び今後の集落存続・再生の検討)に向けて

- ①義務や使命感だけではなく、参加者の生きがいや健康に役立つ、大人の健全な遊びといった要素を持つ活動が結果的に継続につながり、活動の輪を広げる
- ②地域の既存資源、参加者が有する技術により対応できる対策の樹立が、無理をしない持続的な活動を可能とする



右奥 事務局 近松氏
右手前 理事長 成富氏